
枝萌え 第二章「枝(動脈)」

八千代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

枝萌え 第二章「枝（動脈）」

【Nコード】

N2842W

【作者名】

八千代

【あらすじ】

枝萌えシリーズ第二章。

自分のサイトで公開済みです。

「枝（動脈）」

ある日。

日も暮れかけた頃、道端で私は立ち止まった。

立ち止まったのは、目についた枝があったからであった。

冬。限界まで葉を落とした大木の枝は、まるで空に這う血管のようだ。

上腕動脈、とう骨動脈、尺骨動脈、それから先に広がる数種の動脈弓と指動脈。

動脈鑄型標本図と枝を見比べると浮き上がるのは、両者の持つ天然の繊細美である。

しかし私は前者に感じたなまめかしい体温を、冬の枯木には感じなかった。

かわりに感じたのは倒錯的なエロスと侘しさ。寂寥。

彼の枝と枝の空白には虚無が住み着いている。

虚無は切なげに声をからしては通行人の気を引こうとしている。

通行人は足早に通り過ぎる。目もくれない。

そんな中、私は彼に目を止め、カメラのシャッターを切った。

彼には独特の美しさがあった。

しばし鑑賞し、やがて生命への淡い期待を見つけた。

足元に広がる落葉の存在である。

それは彼が青々と繁っていた証明であった。

そうして冬が訪れて、彼は深い眠りについた。

春が来るまで芽を閉じて、機が熟すまで黙し、街の背景としてひたすら眠る。

灯点し頃。一人で佇む大木に、私は人体の構造をなぞらえた。

- f i n -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2842w/>

枝萌え 第二章「枝(動脈)」

2011年10月9日15時59分発行